

唐

系

草

紙

唐糸草紙

怪
きつくわい一奇

壽永二年の秋の頃、鎌倉の兵衛佐頼朝は、八ヶ國のさぶらひたちを、皆鎌倉へ召しのほせ、中門に出でさせ給ひて、さぶらひたちに向つて仰せけるは、いかに方々聞き給へ、そもそも平家、頼朝が威勢に恐れてこそ、都をばおちて候ふに、木曾の左馬の頭義仲、十郎藏人行家らが高名顔に關白にやならん、主上にや參らん、法皇にやならんと、天下をほしいまゝに振舞ふことこそ、きつくわいなれ、平家退治のさきに義仲を退治せん、佐竹の冠者もその由を申し、奥州の秀衡も九郎冠者義經をのほせんと申すなり、この十月の頃なるべし、勢をのこさでつれたまへ、支度せよとぞ仰せける。さぶらひたちはうけ給はり、かしこまると申して、皆國々へぞくだられける。をりふし其頃、鎌倉殿に唐糸の前と申して、御所方の女房あり。これは信濃の國の木曾殿のさぶらひに、手塚の太郎かなざしの光盛みつもりが娘なり。あまりに琵琶の上手なり、琴もすぐれてあればとて、十八の年、鎌

かなざし—金刺

奏者—取次

倉へ召しのほせ、管絃くわいんの座敷を預けらるゝが、唐糸は此由をうけ給はり、なきなの事どもや。木曾殿の御滅亡は、親一門の滅亡なり、いかにもして此事を、木曾殿へきかせ奉らんとて、ひとま所へ忍び入り、文ふみこまぐと書き、下人の男にもたせて都へとてこそ上せらるゝ。下人鎌倉を出でて、十三日と申すには都につきて、父の手塚そぢづかが奏者にて、かの文ふみを木曾殿へ奉る。義仲ひらきて御覽じて、これはいかなる風のたよりと思しめし読み給ふに、鎌倉中にては木曾殿御退治の御評談、奥兩國と關東勢が、一つになり、十月の中頃に都のほりと申すなり、此たびのよろこびには、父の手塚に越後信濃をくだされよ、これにて唐糸がいかやうにも頼朝の御命を、一脇差わきさしあてがひ奉らん、木曾殿の御重代に、ちやくいと申す脇差わきざしをそへて給はれとこそ書いたりけり。義仲御覽じてのめならずと思しめし、御返事をあそばしける。そもそも唐糸が忠臣をば山ほどに思しめす、此度のよろこびには越後信濃を取らするなり。唐糸それにて頼朝が命をとるならば、關東八ヶ國を父の手塚にとらせ、あめがしたの副將軍となさうするなり、唐糸をば、義仲が御臺になすべし、もし又露の命を失はば、父の恩に報ぜよかし、此事人にしらすなと書きとどめ、木曾に傳はる重代のちやくいと申す脇差をさしそへ下されける。下人は忠臣—忠義の意

これを給はりて、鎌倉へこそ下りけれ。

唐糸御文見まるらせ、なのめならず喜びて、かの脇差を机身をゆるさず差しもつて、頼朝の睡眠するみんのたびごとに、狙ひけるこそ恐しけれ。さすがに頼朝は果報いみじき大將軍にてましくければ、とかく遁れ給ふぞめでたけれ。をりふしその頃、大御所さま、御臺さまの、薬の風呂の候ふに、かの唐糸も御とも申してまるられける。其日の風呂の奉行には、土屋の三郎もとすけなり。もとすけ、唐糸の前が小袖のしたより、かの脇差を見つけつゝ、此きぬの主はたれ人ぞと尋ねける。ともの女房うけ給はり、唐糸さまの御小袖なりと申す。もとすけ、大きに驚き、あの唐糸と申すは木曾殿の内に手塚の太郎が娘なり、いかさまこれは我君さまの御命をねらひ奉る女なり、君に此事をしらせ奉らんとて、御所をさしてぞまるりける。頼朝は御覽じて、何とてもとすけは風呂の奉行は申さぬぞ。もとすけうけ給はり、土屋が風呂の奉行に、寶を見つけて候ふぞ、御覽ぜよと奉る。頼朝御覽じて、さても不思議の事どもかな、これは木曾に傳はる重代にちやくいと申す脇差なり、何とてもとすけは見つけたるぞとの給へば、御所方の女房唐糸の前が、小袖のしたより見つけ申して候ふ、そも唐糸と申すは、木曾殿の御内なる手塚の太郎かな

ざしの光盛が娘なり、いかさまこれは我君様の御命をねらひ奉るなり、御身近く寄せられ召使はるゝ御事、なか〳〵君の御不覺なりとぞ申しける。頼朝きこしめし大きに驚き、唐糸召せとぞ仰せける。うけたまはると申して、御前へ召しいだす。御まへにかしこまる。頼朝御覽じて、何とて汝は木曾が重代にちやくいと申す脇差をばさしたるらんと問はせ給へば、これは木曾に仕へ申す時、かたみに見よとて給はりて候ふと申しける。頼朝きこしめし、女の形見に重代は似合はぬなり、先きづかひに思しめすまゝ世のしづまるまで、松が岡殿へあづけ奉れ、土屋とぞ仰せける。土屋うけたまはり、唐糸を引き具して、松が岡にあづけ奉る。其後土屋は唐糸の前が局つばねにて、木曾殿よりの御文を見つけいだし、頼朝へ奉る。兵衛の佐殿御覽じて、天の與ふる寶なりとて、八幡の寶殿に深くこめおかる。もとすけはとにかくに、守護神しゆごしんなりとて、武藏の國池の庄、一萬貫の所を土屋にとてこそ下されける。其後唐糸召せとぞ仰せける。土屋うけ給はり、松が岡へまゐり、このよし申し上ぐる。松が岡にはきこしめし、そもそも頼朝は日本の主ぬしとなるべきものが、禮儀法度れいぎはつどをしらで、日本の主ぬしになりがたし、いかにもとすけ物をきけ、佛は悪人を助けんため、淨土をたてさせ給ふ、その如くにこの界がいにても、悪人を助けんが

さんりん——未詳

舌を喰はん——舌
を噛みて自害せ
んと也

ために、出家は佛舎をたつるなり、たとひ主に向つて弓を引き、親に向つて太刀たちをぬき、牛馬の首くびをきりたりとも、さんりんしたる悪人に子細はあらじと思ふなり、さやうに咎ミガを責むべくば、在家にあづけて置かずして、みづからに預け置き、咎ミガをせむべきとて還せとは、もとすけが不届ふきどきか、賴朝の不届ふきどきか、申すに及ばず、殊にみづから出家と申し、女といひ、賴朝はもとめて恥をかゝシテするか、舌を喰はんと御腹おなかたつ。力及ばず、もとすけは御所さまへまゐり、此由ゆゑをぞ申しける。賴朝きこしめし、その儀ならば、松が岡殿の御腹おなかのなほるまで預けおき奉れとて、かさねて子細はましまさず。其後松が岡殿には、とにかくに唐系は大事のものにて候へば、鎌倉中に置きてはあしかりなん、いそいで信濃へ下れとて、ちやうにちの者を添へらるシテを、忍びて信濃の國へぞ送られける。武藏の國六所と申すところにて、梶原平三景時は、上野の國沼田ぬまたの庄にて、百日の日をふんで、いま鎌倉へ上るとて、唐系と行きあふこそ本意ほいなけれ。景時見るよりも、それなるは唐系か、我君の御命をねらひ奉るくせものなり、それくたゞと下知すれば、ちやうにちのものも、西東にしどうへばつと散る。そのとき景時は唐系をおしこめて、鎌倉へ上りけるこそ本意ほいなけれ。梶原はわが家にも歸らず、唐系をすぐに御所へひかせて參り、上野土産奉ら

ふのわるさーふ
は分にて天運の
意「ぶがわるい」
といふに同じ

んとてまるらせける。頼朝は御覽じて、これは何たる土産にもましたるとて、大きに悦び給ひて、いかさまこれは唐糸がひとりの謀叛じほんにてはよもあらじ、鎌倉中にては、大名か小名の人数にんじゆあるべきぞ、松が崎にて七十五度の問状くもじょうして問へとて、ものゝふどもにぞ仰せける。松が岡殿には此由を聞しめし、梶原と死なんとて、鎌倉へ御輿おんこがたつ。頼朝このよし聞しめし、まづくこなたへ引けやとて、御うらの石の牢へぞ入れられける。唐糸がふのわるさ、君の御果報申すに及ばず。其後唐糸は信濃の國に六十にあまる老母と、十二になる姫みつねをもたれけるが、唐糸十八歳の年、鎌倉へ上りしが、ことしは十二になると覺えたり。名をば萬壽まんじゅの姫と申しけり。唐糸の牢舍らうしゃのよし、信濃の國へ風の便たよりに聞えければ、そもこれは何事ぞとて、天に仰ぎ地に俯して、流涕なみだこがれて泣きにける。萬壽涙をおさへて申しけるは、我身鳥ならば飛びも越し、母の行くへを聞かまほしうこそ候へ。尼公にこうきこしめし、みづからが歎きも汝には劣るまじ、今より後に逢ふ事もありもやせんと歎かれる。萬壽も一間所へ歸り、衣ひきかつぎて、流涕なみだこがれ泣きけるが、さ夜ふけ方に、乳母の更科をめされ、いかにや、更科うけたまはれ、わが母の唐糸は、鎌倉に石の牢にましますとうけ給はり候ふぞ、わが身いかやうにも鎌倉へ尋ねこし、御ゆくへを

あとこととも思は
ず一まこととも
思はずの誤か

をさあいーをさ
なき人といふ意

絹
みのぎぬ—美濃
しけもん—織し
き絹絲をしきと
いふ、それにて
縋りたる絹をい
ふにや

尋ねきかまほしく候へ、更科をひとへに頼む、つれて鎌倉へ上りてくれよと申されける。更科うけ給はり、をとことも思はず、親をば何とか尋ね給ふべき、萬壽さまとぞ申しける。萬壽きこしめし、これはいはれぬ申しごと、みづから鎌倉へ上り、唐糸を親なると尋ねて参らばこそ人も不審をたて候ふべき、鎌倉殿か、それなくば秩父殿か、和田殿へ、五年も三年も、奉公を申し、鎌倉にあるならば、いかでか母の御ゆくへを聞きいださるべきぞ、更科いかにとの給ひける。更科うけ給はり、をさあいの心にさへ親の御恩を思しめす、たとひ曠しき者なりとも、お主の御恩をわすれ申さんや、野の末山の奥までも、みづから御とも申すべしとぞ申しける。まんじゆ聞しめし、なのめならずと思しめし。さらば今宵に思ひたち、旅の裝束せんとて、萬壽その夜の裝束には、肌には練のあはせを召し、親を尋ねる門出なれば、めでたき事を菊染かくじやの御小袖おんこそで、しけむらさきの織物に、十二重じゅうをひきかさね、柳色の袴はかまをきて、市女笠いちめいりをめされける。めのとが其夜の裝束には、そめつけにみのぎぬの染小袖、七つひとへをひき重ね、麻の袴はかまをくるまよに、しけもんのつゝみには、よろづの物を忍ばせて、乳母めのまごがこれをいたどいて、故里ふるさとを出でられける。萬壽の姫も更科も、あとさき知らぬ旅なれば、山路のすゑに行きまよひ、呆れはててぞ

立たれける。萬壽仰せけるやうは、いかに更科うけたまはれ、鎌倉は東の方と承る。月日は東の空より出でて、夕日は西に入り給ふ、月日を心にあててゆけ、更科とのたまひて、月をして行くほどに、既に其夜も明ければ、手塚の里にては、萬壽の姫、失せさせ給ふとて、貴賤群集をなしければ、尼公此由きこしめし、いか様これは、鎌倉の方へ出でたるらん、いそいでそれをとどめよとて、かちや徒跣はだしにて出でられける。信濃の國雨の宮といふ所にて、やがておつき給ひける。

尼公萬壽に抱きつき、いかに聞くかや、萬壽の姫、唐糸は、はや死にたるものと思ひしに、汝までみづからを捨て、鰐の口へ尋ね行き、鎌倉殿へきこしめさば、にくき唐糸が子なりとて、必ず死罪に行はれ奉らん、思ひとまれと泣き給へば、萬壽承り、みづから鎌倉へまゐりて、唐糸を親と申して、尋ねてまるらばこそ、人も不審に思はんずれ、鎌倉殿か、和田殿か、秩父殿へ、二年も三年も御奉公を申すならば、いかでか母の御ゆくへ、尋ねいださで候ふべきと思ひ立ちてさふらふぞや。尼公聞しめし、其儀ならば、鎌倉の近くに、藤澤の道場と申して、遊行和尚の建て給ふ御寺あり、知る人のあれば、みづからは藤澤の道場に隠れて、御身たちは鎌倉へこすべきなりとぞ仰せける。萬壽き

こしめし、人目を忍ぶ旅なれば、多勢つれては
叶ふまじ、其儀ならば、いかなる淵瀬へも身を
投げて、浮世のひまをあけんと泣き給へば、尼
公きこしめし、人の子の親を思ふこと、稀な
る道と聞きつるに、さても汝は親孝行のもの
かな、其儀ならば力なし、尋ねてもみよ、更
科をひとへに頼むなり、よきに供してくれよか
し、更科とぞ仰せける。めのとは承り、御供申
していづるより、野の末山の奥、火の中水の底
まで、共に入り、共に沈み申すべし、御心安
くおほしめせ、尼公さまとぞ申しける。尼公は
きこしめし、其儀ならば鎌倉へ下るまで、男
ひとりつけんとて、五郎丸をぞつけ給ふ。さら
ばと言ひて立ち別れ、そなたこなたへ行く袖の、



入山—上野にあり

星の谷—相模にあり

とがみ—底上、
相模にあり

はらふ涙のひまぞなき。萬壽の姫は、雨の宮を立ち出でて通る所はどこぞ。親子の契は、ふかしの里こそめでたけれ。淺間の嶽に立つけぶり、身には餘れる思ひにや、いま入山をうち過ぎて、上野の國に隠れなき、常盤の宿をもうちこえて、一の御宮をふし拜み、二のたまはらに出でしかば、親の名のみか、ちよぶ山、末まつ山をうち過ぎて、霞の關をもわけこして、入間の郡、やせの里、いくらの里をか越しつらん。曇らぬかけは星の谷の、とがみ河原をもうち過ぎて、鎌倉山につき給ふ。鶴が岡に參り、南無や八幡大菩薩、よろづの御神にこえさせ給ひ、親孝行の御神とうけたまはりて候へば、わが母の唐糸の露の命のうちにめぐり逢はせてたび給へと、肝膽をくだいて祈られける。

其夜はこもりゐて、明けぬれば、文こまぐと書かれける。みづから何事なう鎌倉まで参りて候ふ、とにかくに、うばさまの、御命をよくく惜ませたまふべし、命をまたう持つ龜は蓬萊にあふとかや、ある歌に、

命あらばいくよの秋の月や見ん消えてはいかに露の玉の緒
と聞く時は、たゞ命がせんにて候ふぞや、御命ましくてこそ、唐糸にもみづからにも又

命をまたう云々
一謡

尋ねるもののが一
たのめるもののが
の衍か

はあはせ給ふべけれと書きとめて、鎌倉山より手塚の里のうばさまへ、萬壽姫とかきて、五郎丸をば鶴が岡へつき、これまでなり、さらばとて、それより手塚の里へ返さる。そののち萬壽姫は、御所さまへまゐり、御奉行をのぞまれける。御臺さまには聞召し、國はいづくの者なるぞ、親をばたれと申すやらん。萬壽うけ給はり、武藏の國六所別當の者にて候ふ、親を名のり申すまじ、御奉公申すならば、尋ねるものが親にて候はんとぞ申されける。御臺此由きこしめし、親を名のり申さねば、御氣づかひに思しめす。まづまづ侍従の局にて奉公申せとのたまひ、御局おんつばねがたへ預け給ふ。萬壽は侍従の局にてよきに奉公つかまつり、人の返事をわがにして、人の立たん所へも、わがものと立ちゆけば、御局おんつばねがたにも、萬壽はきようの者なりとて、御なさけをぞかけ給ふ。廿日の過ぐるその間、萬壽は人の物いふたびごとに、わが母の唐糸と、名にても人の申すかと、聞けども聞けども言はざりけり。ある夜の寝覺に萬壽、乳母ゆのこに語られけるは、いかにや、更科うけたまはれ、今まで廿日あまり過ぐるうちに、唐糸と名にても人の申すかと、聞けどもく申さぬは、浮世にもなきか、生きて浮世にあるならば、人をばよかれあしかれ沙汰する習ひなり、名をだに申す人もなし、必ずこれは死したる人なり、卅二日たづねき

萬事はとまれ
是非とも留りく
れよ

て、逢はではつべき悲しさよと、ふし沈みてぞ泣かれける。めのとは大きに腹をたて、信濃を御いでのは、二年も三年も、鎌倉中にましまさんと仰せありしが、いまだ廿日も過ぎざるに、さやうに御涙をながさせ給はゞ、涙の色にて人に知られ、必ず死罪にあひたまはん、其儀ならばみづからは是にて憂目うめをみんよりも、あすは信濃へ歸り申さん、御身ばかりになり給へ、萬壽ばんじさまとぞ腹をたつ。萬壽大きに驚き、めのと更科むかわにいだきつき、其儀ならば今より後は歎くまじ、萬事はとまれと泣き給ふ。めのとも主ぬしも泣あかす。夜も既に明けければ、萬壽姫ばんじは御主ぬしさまの御うらへ出でて、あたりを眺めて御覽みづみづし下女しもめする所に、いづくともなく御みづし一人まるり、いかにやのう萬壽ばんじ此釤門くぎもんのうらへ入らせ給ふな、御法度ごはつどなるとぞ申しける。萬壽きこしめし、御法度ごはつどはいかにと問はせ給へば、みづしうけ給はり、御所様ごしょじょうがたの御女房、唐糸からいとの前と申すは、石の牢につきこめられしに、これよりあなたへは、男女をしこんなによらず、御法度なりとぞ申しける。萬壽きこしめし、唐糸といはれて、雪ならば消え入るばかりに嬉しくて、みづしはよく教へ給ふ、われは夢にも知らぬなりと、喜ぶ體たいにて御所へまるり、めのとを近づけて、唐糸さまの御ゆくへを、只今きいて候ふぞ、よろこび給へと言ひながら、又かきくどき泣きたまふ。

めのとも喜びの涙をぞ流しけり。

人の咎めぬ一人
を咎めぬの誤か

あま一 天

岩が根さわぎあ
たる一岩が根にさ
わぎあたる意
十時頃一亥中、

頃は三月廿日に鎌倉山の花見とて、をりふし御所には人もなし。萬壽は、こよひ母の御ゆくへを尋ねて見んとて、御所のうちをば忍び出でて、釣門くぎもんをみてあれば、正八幡の御方便かや、をりふし番衆もなかりけり。門も細目にあいたるなり。萬壽は嬉しけれども、よその見る目もあるらん、人の咎めぬ里犬さきいぬあるやとばかり疑はれ、めのとをば御門の脇にたゞせて、わが身は内へたづね入り、かなたこなたを尋ねけり。あま吹きおろす松風の、岩が根さわぎあたるをば、人やあるかと疑はれ、心を靜めてあたりを見る。廿日るなかの雲はれて、月すこし見え給ふ。松の一むらある中に、尋ね入りて見てあれば、石の牢こそ見えにけれ。萬壽うれしさに急ぎたちより、牢の扉しづらに手をかけて、内の體てを聞きけるに、唐糸とうじは人音ひとこゑを聞きつけて、そもそも門かどにおとづるよは誰なるらん、變化へんげのものか、又は唐糸が討手にばし向く人か、御使にてましまさば、浮世のひまをあけたしと、かきくどきてぞ泣きにけり。

萬壽は承り、いとど哀れはまさりけり。牢のすきより手を入れて、母の手をとり、これは母の手にてましますか、わが身は萬壽にてさふらふぞや、なつかしさよと泣きにける

涙は淵となる。唐糸聞きて、萬壽は信濃にこそおきつるが、今年は十二になると覺えた
り、夢かうつよか幻か、夢ならばとく醒めよ、さめての後はうらめしやと、かき口説き
てぞ泣かれける。萬壽、おほせの如く信濃の國にさふらふか、御牢舍のよし風のたより
に承り、御命に代らんと、これまで參りて候ふぞ。唐糸きこしめし、其時萬壽が手をと
り、嬉し泣きにぞ泣き給ふ。御涙をおさへ、うばさまの御命はいまだめでたうまします
か、なつかしさよと仰せける。萬壽うけ給はり、何事もましまさず、御心やすかれと申
しければ、唐糸聞きて、汝ばかり参りたるか。萬壽うけ給はり、更科をつれてまるりけ
る。唐糸きこしめし、いづくに忍ばせ置きけるぞや。萬壽申しけるやうは、よその見る
目のいぶせさに、御門の脇にたよせておき申し候ふとて、やがてつれてぞ参られける。
唐糸御覽じて、更科めづらしや、唐糸がありさまを、不便と思ふべし、萬壽は親子の契
なれば、尋ねてのほることわりなり、汝はめのとと云ひながら、他人にて候ふものが、
これまで上るは不思議なり、昔より世にある主をば尋ねれども、世におちぶれたる主の
跡たづぬるものは、上代にもあらじと、互に流す涙の色、ふる雨
のごとくなり。其後唐糸、涙をおさへて仰せけるは、御身も人も、生きて浮世の對面

思ひきり一決心
し
はつたと一斷じ
て

しきがへて一賣
りしきなして食
物などを求めて
しのの間一獅子
の間なるべし

して、浮世の妄執まうしふはれてあり、更科をひとへに頼み申すぞ、つれて信濃へ歸り申せと仰せける。萬壽うけ給はり、信濃の國を出でしより此かた、御命おんめいに代らんと思ひきり、まゐりて候ふ、はつたと信濃へ歸るまじと泣きければ、唐糸からいときこしめし、その義ならば、たびくまるなるなよ、人に知られて候はゞ、君よりも唐糸が子なりとて、我よりさきに死罪流罪に行はれ奉らん、よくく忍べと泣かれける。萬壽承り、國をも名のり候はねば、存する人も候ふまじと、涙を流し語る。夜すでに明ければいとま申して、さらばとて御所のうちへ歸りつゝ、小袖こそづを町まちへいだし、しきがへて、めのとが忍ぶ時もあり、みづからが忍ぶ時もあり、九月ここのづがその間、母を養ふあはれさよ。次の年の正月二日に、鎌倉殿の常に御祈念をなさるよ、しょの間まの御座敷に小松六本、疊かさねのへりに根をさし、生はさすに、疊のへりに根をさし、生はひいでたること不審なれ。頼朝大きに騒さわがせ給ひ、かやうなる草木は、土にこそ根のえいでたること不思議なれ。頼朝が身のうへか、博士を召せとの給ひて、其頃鎌倉中に隠れなき安倍あべの中もちと申す博士をめされて問はせ給ひける。いかにや、中もちうけ給はれ、常に祈念するしょの間の座敷に、今夜こよの内に、小松が六本生ひいでたり、鎌倉中のわづらひか、頼朝が身の上

ちんやさいか
—未詳—

か、天下の亂れか、占へとぞ仰せける。博士承り、そもそも萩萩の、花の命をのぶること、あまたとは申せども、西王母が園の桃、三千年に一度花さき、實のなると申せども、見る人も候はず、ちんやさいかい八千世の年をふることも、ちくさの八千年をふることも聞くに、一千年の壽命じゅふねうも、相生の松にしくことはなし、そもそも君が千代をかさねて六千歳、鎌倉山に年をよせ、榮えさせ給ふべき、かほどめでたき御事に、相生の松が枝を鶴が岡の玉垣の御内に蓬萊をうつしかへ、十二人の手弱女をうつして、今様いまやうを歌はせたまはど、神徳を深く君もめでたうましまさんと、占ひたることめでたけれ。

賴朝なのに思召し、六本の小松を鶴が岡の玉垣の内へうつし、十二人の手弱女を揃へらるゝ。まづ一番には手越の長者が娘千壽のまへ、二番には遠江の國ゆやが娘の侍従、三番には黄瀬川の龜鶴かめづる、四番は相模の國山下の長者が娘虎御前ごらこぜん、五番は武藏の國入間川のほたんといひし白拍子、これをはじめて十一人なり。鎌倉中廣しと申せども、ひと人に事を缺き、色々尋ねらるゝ。其後萬壽の姫のめのとは、萬壽を近づけて、御身はみめよく、今様は上手にてましませば、此度出でて今様を歌はせ給へ、萬壽さまとぞ申しきる。萬壽きこしめし、このたびの今様は世の常の今様にかはりて、めでたき事をばみ

づから何と計らふべき、思ひもよらずと仰せける。更科大きに腹をたて、かやうなる時、今様をうたはせ給ひてこそ、御よろこびもましまさんとて、御局さまへ参り、萬壽こそ、今様の上手にて候へと申し上ぐる。御局よりも、御臺さま、頼朝さまへ御披露あり。頼朝大きによろこび給ひ、萬壽一目みんとて御前にめされ、御覽じて大きによろこび、御臺さまより十二ひとへの御装束をぞ下されける。もとより姿すぐれたり、肩をならぶる女はなし。頃は正月十五日、御前に山をたて、大宮のゆんでには頼朝の御座敷、八ヶ國の大名小名の御座敷、かず八百八とぞ聞えける。さて又めてには、大御所さまと御臺さまの御座敷をはじめとして、八ヶ國の大名衆のうへがた上庸衆の御座敷かずを知らず。鎌倉中の貴賤上下がまわりて見物申しけるほどに、鶴が岡に駒を立つべきかたもなし。十二人のやをとめ、七十五人の宮人、神樂を奏して奉り、手越の長者が娘、千壽の前ときこえける、貴賤群集の言の葉に、海道くだりをつどけたり。逢坂山のよるの月、くもらぬ影をやながむらん、勢多の唐橋野路のぢの里、霞にくもる鏡山、不破の關屋の板庇いたびさし、假寢の夢はやがて醒が井の宿しゆく、むしのいせいやをはりの國、みかはなる三河にかけし八橋の、くもでに物や思ふらん、知るも知らぬも遠江の、濱名の橋のいるしほに、さよねど上る

ひきまー遠江の
引馬
せとー駿河の瀬
戸山

しほりはぎーし
をり萩

あま小舟、こがれて物や思ふらん、ま弓つき弓ひきまの宿、さよの中山せとを過ぎ、う
つの山邊の葛のみち、手越をすぎて行くほどに、月を清見が關の戸を、おし明けがたの
空みれば、富士の煙や靡くらん、夢にもみやこ人こそめでたや、御代にはいづの國、浦
島が玉手笛、あけて悔しき箱根山、鎌倉山をきてみれば、鶴が岡とや申すらん、鶴は千
年名鳥、松は千とせの名木、めでたしと歌うたり。二番は黄瀬川の龜鶴、しほりはぎを
歌うたり。伊勢の濱萩なにはの蘆、鎌倉や武藏野の、草の名多しと申せども、しほりは
ぎにしくものは候はじと、歌うたり。三番はゆやが娘の侍従、太平樂をふむ。四番は入
間河のほたん、すぢりわりを歌うたり。五番のくじは萬壽なり。御臺さまより御裝束給
はる。としは十三の春なれば、十二ひとへを著しつゝ、花のまそでを返し、樂屋のうちよ
り出でけるを、物によくく譬ふれば、花木に鶯のはぶき出でたる風情も、是にはいか
で勝るべき、はたとあけて歌うたり。鎌倉はやつ七郷とうけ給はる、春はまづさく梅が
やつ、扇の谷に住む人の心はいと涼しかるらん、秋は露おくさゝめがたに、いづみふ
るかや雪のした、萬年かはらぬ龜がへの谷、鶴のからごゑ打ちかはし、由比の濱にたつ波
は、いくしま、江の島つどいたり、えのしまのふくでんは、福壽海無量の寶珠をい

谷ー「たに」と傍
訓せるは「やつ」
の誤なるべし
から聲ー囁聲
かふくでんー福田

うつまちー未詳

みなしろー皆白
にて全部白きを
いふ

たんこふしきー^{未詳}

だき參られたり、君が代はさざれ石のいはほとなりて苔のむすまで、高砂や相生の松萬歳樂に、御命をのぶ、東方朔の九千歳、うつゝらの八萬歳、長命居士の一千歳、西王母の園の桃三千年に一度花さき、實のなると申せども、相生の松にしくことさふらふまじ、そもそも君は、千代をかさねて六千歳さかえさせ給ふべき、かほどめでたき御ことに相生の松がえ、福壽無量のよろこびを、君に捧け申さんと、小松の枝をゆりかづき、みなしろの大まくへ、二三度四五度まひかよりたりければ、頼朝御覽じて、ほうらいにたちゑほし、白鞘卷をさしながら、みなしろの大幕を、投げあけて、かゝるめでたき御ことに、相生の松が枝を給ふらんとて出で給ふ。もとより頼朝は今様は上手なり、たつ波るる波よする波、引きしほの拍子足を、たんこふしきと踏んで、扇流しを歌ひますし、萬壽が花のたもとへ、頼朝の狩衣の御袖、まひかさねく、二三度四五度舞はせたまへば、風も吹かぬに大宮のたまの戸もきりくばつと開き、八幡も御納受ありときこえける。さるほどに八百八つのみす簾の几帳もざよめて、貴賤群集を返しける。そののち頼朝は座敷のうちへ入り給ふ。萬壽姫は樂屋のうちへと引いて入る。頼朝仰せけるやは、たれやの人か計らふべしめでたくもはんでもさめよとて、今様はましまさず、春の日の

はんてー誤脱あ
るべし意味通じ
難し

くるとまで酒盛さかもりとこそ聞えけれ。其日もかたぶけば皆々鎌倉へぞ歸らせたまふ。さて次の日、頼朝は萬壽を御前に召し出だして、さて汝は今様の上手かな、めでたうこそは歌うたれ、國はいづくの者なるぞや、親をばたれと申すらん、親をなのれ、御引出物給はるべきとぞ仰せける。萬壽うけたまはり、名のり申すまじと思へども、此たび名のり申さずは叶はじとや思ひけん、思ひきりてぞ名のりける。みづからが親は御所様の御うらの石の牢につきこめ給ふ唐糸にて候ふなり、されば四つ子にて棄てられさふらふが、去年の春の頃、母が牢舍のよしを、信濃の國にて承り、今はあるにもあられずして、母の命に代らんとおもひ、これまでまるりて候ふぞや、このたびの今様の御引出物には、母が命にみづからを取代へてたび給へとぞ申しける。頼朝きこしめし、大きに御おどろかせ給ひ、しばらく物をものたまはず。稍あつて仰せけるは、唐糸は汝が母にてありけるぞや、唐糸を助くる事は、鳥の頭かしらが白くなりて、駒に角のはゆるとも助くまじとは思へども、此たびのよろこびには、いづれの物か惜からん、唐糸が露の命、今まで存命にてあるならば、急ぎ召しいだし、萬壽に取らせよとぞ仰せける。土屋うけたまはると申して、石の牢を引きやぶらせ、二とせに餘る牢舍せし唐糸をめしいだし、御所さまの庭に

ふしのゆひわた
+富士の結綿か
御ひき—御引出
物
美濃のじやうほ
ん+美濃絹の上
品

ばんじの床—萬
事休する程の重
病の床に泣き伏
すとの意なるべ
し

召し具して、萬壽にこそ渡されける。萬壽なのめによろこびて、母にひしと抱きつき、嬉
し泣きに泣きければ、母もろともに涙をながす。頼朝をはじめ奉り、大御所御臺いづれ
もましますさぶらひ達、人の寶には子にましたる寶なし、さても萬壽は女とも思はず、
十二三のものが、これまでまるり、鰐の淵なる親を助けたる、不思議なりと、みな感涙
を流しけり。其後頼朝は萬壽に引出物をえさせんとて、信濃の國手塚の里一萬貫の所を
ば、萬壽にとてぞ下されける。御臺さまより黃金千兩ふしのゆひ綿一千把、萬壽が宿
へぞ送られける。大御所さまの御ひきには砂金五百兩、美濃のじやうほん一千匹下され
ける。これをはじめて鎌倉中の諸大名、われもくと引出物萬壽姫にたまはりける。頼
朝仰せけるやうは、萬壽をば鎌倉にとどめたくは思へども、母が心の恐しきものなれば、
いそぎ信濃へかへれとて、御いとまをぞ給はりける。萬壽なのめに喜びて、唐糸をひき
つれて信濃へとてこそ歸りけれ。のほりには三十二日に上りしが、かへりには五日にこ
そは下られける。手塚の里におちついて、うばの尼公を見申すに、ばんじの床に泣きふ
して、今をかぎりと泣き給ふ所へ、萬壽まるりて候ふ、いかにや申さん尼公さま、われ
われは萬壽にて候ふぞ、これは唐糸にておはしますと申しければ、尼公は親子のものを

御覽じて、うれし泣きにぞ泣き給ふ。一族一家のものまでも、よろこびの涙を流す。されば萬壽、親孝行なるゆゑにより、鶴が岡の八幡大菩薩の御方便にて、今様をうたひ、所領を給はり、一とせあまり牢舍せし母をたすけ、かずの寶を給はりて、子孫ともに繁昌するなり。萬壽姫の親孝行ゆゑなりとうけ給はり候ふ。かよるめでたき物語かなと、感ぜぬ人はなかりけり。